

## 第103回全国高校サッカー選手権大会 千葉県大会 総評

### 【はじめに】

6月から大会が始まった本大会。1次トーナメントが令和6年6月15、16、29、30日の4日間、2次トーナメントが9月1、8日の2日間、決勝トーナメントは10月5、6、13、19、20、26、27、11月3、9日（土）の9日間行われた。決勝トーナメント進出校は全43校。県立高校15校、市立高校3校、私立高校25校である。ベスト14進出校の高円宮杯JFAU-18リーグ（以下リーグ戦という）の所属はプレミアEAST2校、千葉県リーグ1部所属6校、2部が5校、3部が1校であった。ベスト4進出校は流経大柏、日体大柏、市立船橋、八千代の4校。準決勝は柏の葉公園総合競技場、決勝はフクダ電子アリーナで行われ、優勝は流経大柏、準優勝は日体大柏という結果になった。

### 【今大会を振り返って】

八千代はベスト14進出校では唯一の県立高校であり、準決勝では優勝した流経大柏から1点を奪い1-1に迫るなど、準決勝の舞台でパスサッカーが躍動した。昨年度、本大会で優勝し全国大会ではベスト4となった市立船橋は今年度の千葉県総体では流経大柏との決勝戦で2-1で勝利し優勝。『北部九州総体2024』ではベスト8であった。しかし、今大会は準決勝で日体大柏と1-1でPKの末惜しくも敗戦した。このことから、千葉県の頂点に立つことは容易ではなく、まさに全国トップレベルの闘いがこの選手権大会で繰り広げられた。決勝戦で惜しくも敗れた日体大柏は千葉県リーグ1部で現在首位である。GK①早川、DF③岡崎 DF④奥村をはじめとした鉄壁の守備陣や、攻撃では相手の状況を判断しポジションを可変し、時には前線の空いたスペースを効果的に使いビルドアップする。チーム全体の技術力が際立ち、市立船橋、流経大柏を苦しめた。

準決勝、決勝の全10得点は、ロングスローが起点1点、CK1点、FK起点3点、サイド攻撃2点、DFの背後へのロブスルーパス1点、ミドルシュート2点であった。決勝では流経大柏の4得点全てがセットプレーからであり、変化をつけ相手のボールウォッチャーを作り出し見事にデザインされた得点であった。今大会の攻撃の特徴はサイド攻撃や相手の背後へのスルーパスでマークを外し、ゴールに迫るシーンが多くみられた。時間をかけずに厚みと幅を作り出したビルドアップから、日体大柏FW⑭小泉、流経大柏FW⑰粕谷といった背後のスペースを伺いながらも前線中央でキープできる選手で相手DFを集結させる。サイドにできたスペースをスピードやテクニクのあるSHとSBのローテーションで攻略していく展開になった。守備の特徴は低い位置でのブロックを形成せず、前線からハイプレスを用いるチームが多く見られた。トーナメント戦ということもあり、相手からボールをいち早く回収し、自チームが保

持する時間を増やす戦術が多く取られていた。一方、目立った課題はクロス守備と背後のスループスへ守備対応である。セットプレーで変化をつけられた際やサイドの選手にボールが渡った際、中のマークの受け渡しが曖昧になり、同一視できなかつたり身体を寄せられなかつたりする状態になることがあった。当然、決勝トーナメントを勝ち進むに連れ仲間や観客の大声援で指示の声が届かないこともある。千葉県を勝ち進むにはそういった状況も想定し、攻守においてピッチ内で選手自身が修正する能力が必要になる。

流経大柏は、3大会ぶり8回目の全国大会出場を決め、現在プレミア EAST で6位の位置につけている。高校トップレベルのインテンシティの高さは群を抜いており、決勝戦では後半になってもプレススピードが変わることがなかった。また、個人技術やフィジカルが強く、攻守ともに1対1の場面で負けることがなかった。決勝戦では4-1と圧倒的な勝利をみせた流経大柏、昨年度出場した市立船橋は全国ベスト4であった。千葉県代表として是非その記録を上回る結果を期待したい。

#### 【最後に】

昨年度から声出し応援が可能となった。今大会も各会場で会場設営、補助役役員、応援等で選手を全力でサポートする姿がみられた。そのサポートによってピッチに立った選手はどれだけ背中を押され、エネルギーに満ち溢れたか計り知れない。試合終了後には家族、指導者、仲間達に感謝の言葉を伝える姿がとても印象的であった。改めてサッカーを通して、沢山の関わりが生まれる大会であると気づかされた。

今大会を無事に終わられたこと、大会の運営に携わっていただいた全ての方々に感謝の意を表すとともに、優勝した流通経済大付属柏高校の全国大会での躍進を期待し、第103回全国高校サッカー選手権大会千葉県大会の総評とさせていただきます。

千葉県立市原八幡高等学校 石川大志